拓北・あいの里地区社協ミニ通信

この広報紙は赤い羽根共同募金の支援を受けています

拓北・あいの里地区社会福祉協議会
会長：渡邊　寛　　広報部長：森下　満

No 86　　令和 6年 6月 21日

6月5日(水)に社協常任理事会が行われました。
各部の活動状況と今後の予定についてご報告します。

新型コロナは増加に転じたようです。致死率が3割に上るといわれる劇症型溶連菌も心配です。感染症対策の基本である手洗い等を心がけましょう。

▌総務部より ▌

・定期総会開催

今年の地区社協の定期総会は、５月 25 日(土)午後２時から３時まで、当社協役員 15 名、団体会員代表 33 名、来賓５名、総勢 53 名の参加を得、地区センター多目的ホールにて開催されました。報告事項、議案事項はすべて承認されました。

なお、詳細については９月発行予定の「福祉のまちづくり通信 59 号」でご報告いたします。

・福祉除雪の協力員さんを対象にした意見交換会

７月７日（日）14 時から、地区センター多目的ホールにて、福祉除雪に関する感謝、やりがい、問題点、改善点、連携等について意見交換する予定です。ぜひご参加を。

▌ふれあい交流部より ▌

・６月４日（木）の「ひまわりクラブ」は拓北・ひまわり会館に４組８名の親子さんが参加され、自由遊び、絵本の読み聞かせなどを楽しまれました。

次回は７月 11 日（木）10：00～11：30、地区センター和室にて開催予定です。

・「福まちサロン」は６月 27 日（木）10：00～11：30、地区センターにて、７月 25 日（木）10：00～11：30、拓北会館にて、それぞれ開催予定です。

・6月9日(日)、13:30～15:30、拓北のカフェオリーブさんで「ほくほく子ども食堂」のお手伝いを行いました。読み聞かせやなぞなぞ、一緒に歌を歌ったり、メニューの配膳をしながら多世代との交流を楽しみました。難解ななぞなぞに子どもたちは元気な声で答えてくれていました。

また、ふれあい交流部の活動やカフェオリーブさんを紹介した北区社協だより特別号が近く発行されます。楽しみにご覧ください。

総勢 53 名が参加した５月 25 日の社協定期総会の様子

４組・８名の親子さんたちが参加した、６月４日のひまわりクラブ

６月９日のふれあい交流部による拓北・カフェオリーブでのほくほく子ども食堂のお手伝い、読み聞かせの様子

地区センター29 名、オンライン１名、合計 30 名が参加した、５月 21 日の地域ケア部の例会

▌地域ケア部より ▌

５月例会は 21 日（火）18：30～20：00、地区センター２階集会室にて、医師・あいの里内科消化器科院長・高橋文雄（たかはし・ふみお）さんをゲストに「あいの里内科消化器科クリニック（あいの里１条６丁目 2-2 クリーンリバーネオシティあいの里１階）の事業継承について」をテーマに話題提供をいただく予定でしたが、ゲストの高橋先生がご都合によりご参加いただけなくなりました。急きょ、ピンチヒッターとして本会代表幹事、北海道医療大学病院医療相談・地域連携室・吉野夕香（よしの・ゆか）をゲストに「この地域の医療を考える」をテーマに、話題提供をいただき、意見交換を行いました。

［ 裏につづく ➡ ］

地区センターでの対面とオンラインでのハイブリッド方式で行われ、参加者は地区センター29名、オンライン1名、合計30名。

前半では、吉野さんが高橋先生に事前にインタビューをおこない、それをまとめたレポート（A4・4頁）をもとに、高橋先生の生い立ちと幼少期のこと、都立上野高校から札幌医科大学・札幌への道、札幌での学生生活と出会い、学園紛争時代の進路・留学、帰国後の研鑽と開業、あいの里での開業・ともに成長する街、医師会活動と人とのつながりで広がる世界、拓北・あいの里地区の医療への責務とこれから、についてお話がありました。

高橋文雄先生は1950年、東京都台東区で生まれ、高校まで東京・上野で育ちました。幼少の頃、小学校低学年まで繰り返し病院通いする病弱な子供で、大きくなったら病気で苦しんでいる人を治す「お医者さん」になりたい、と自然に思うようになってきたそうです。

先生はお母様が札幌出身ということもあり、札幌医大を志望し、1972年に入学。医学部卒業時には札幌医大への恩返しのお気持ちから北海道の医療を担うべきと決断し、同大医局に入局。4年後に留学する機会があり、米国ニューヨーク市のアインシュタイン医大に研究生として渡米し、「潰瘍性大腸炎の病因」をテーマに研究に従事し、帰国後、学位論文としてまとめられました。

帰国後、学位を取得してから医局の関連病院に消化器内科の臨床医として赴任しましたが、年余を経る内に、“かかりつけ医として日常的に患者さんに接することができる開業医こそ医者の本来あるべき姿”、と考えるようになり開業を決意。当時、新興住宅地として開発されたあいの里地区の明るい街並みと自然環境の良さに惹かれて、1990年、39歳の時にあいの里で開業されました。

5月例会でテーマとなった、あいの里内科消化器科クリニックの外観

地域の成長とともに医療を提供し学校医も担い、古稀を迎える2020年を引退と考えていましたが、その年の2月からコロナパンデミックが発生し、発熱外来対応とワクチン接種のため診療を継続してきました。この3年間で発熱外来は約1,600名、ワクチン接種は延べ4,158名となり、地域住民に医療を提供するという役割は果たしてきた、と遂に院長交代を決断されました。

令和6年7月から、「あいの里内科消化器科クリニック」では岸野宏貴医師へと院長が交代し、名称も「あいの里内科ファミリークリニック」に変わります。高橋先生は、これからも地域に根差した医療機関を維持し地域医療に貢献していきたい、と願っているそうです。このあいの里での地域医療への熱い思いが伝わり、ご苦労もあったかと思いますが、長年のご尽力に心から感謝の気持ちになりました。

後半では、拓北・あいの里地区の地域医療の今後について、会場からの意見を交えて議論を深めました。地域医療の時事問題として、北海道医療大学が2028年を目途に北広島市へ移転するとの報道に関して、現段階ではあいの里キャンパスの大学病院の見通しは未定のため、想定される考えが出し合われました。例えば、複数の科の診療をまとめて受けられたことが住民の利点としてあげられ、今後それができなくなるのでは、との不安の声がありました。特に近年はバス減便も打撃となっており、高齢者や障がいをもつ患者さんはバスやJRを利用することが多く、通院の足の問題があるためです。複数の病院を回るのではなく、一箇所で複数の科の診療を受けられることが住民の負担を軽減すると外来機能存続の要望の声が多くありました。

当地域の診療所の先生方と病院は、札幌市医師会の舵取りで、コロナ禍に地域ぐるみでワクチン調整を行ったことや専門治療が必要になった時、各々が相談できる医療機関を持ち連携していること、また、救急搬送や入院は東区の医療機関が中心で、受入側の病院、医師の努力に支えられており、当地域だけでなく隣接する地域の取り組みにも目を向けることが重要であるとの説明もあり、皆真剣に耳を傾けていました。この地域の医療を考える機会になりました。

なお、6月例会は18日（火）18：30～20：00、北海道医療大学歯学部教授・飯田貴俊（いいだ・たかとし）さんをゲストに「誤嚥性肺炎が気になるなら、口とのどを鍛えましょう」をテーマに、地区センター2階集会室にて、話題提供をいただき、意見交換を行いました。その内容については次号の87号で報告いたします。

◇ 今後の予定 ◇

7月例会は16日（火）18：30～20：00、地区センター2階集会室にて、北海道医療大学病院医療相談・地域連携室の吉野夕香（よしの・ゆか、本会代表幹事、）及び工藤恭子（くどう・きょうこ、本会部員）の二人ををゲストに、「ソーシャルワーカーと地域医療のこれから」をテーマに、話題提供をいただき、意見交換を行う予定です。

地区センターでの対面とオンラインでのハイブリッド方式で行います。「ケア施設町内会会員メーリングリスト」登録者にはZoomアクセス情報をお知らせします。その他の方はケア施設町内会事務局・長谷川までメールhasepy55@gmail.comでお問合せ下さい。